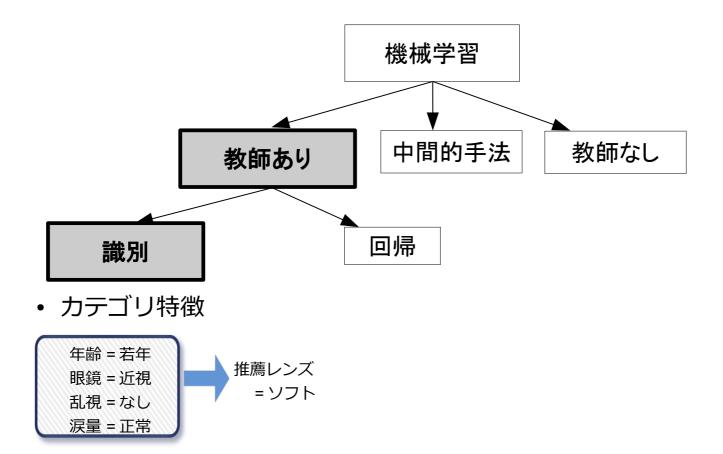
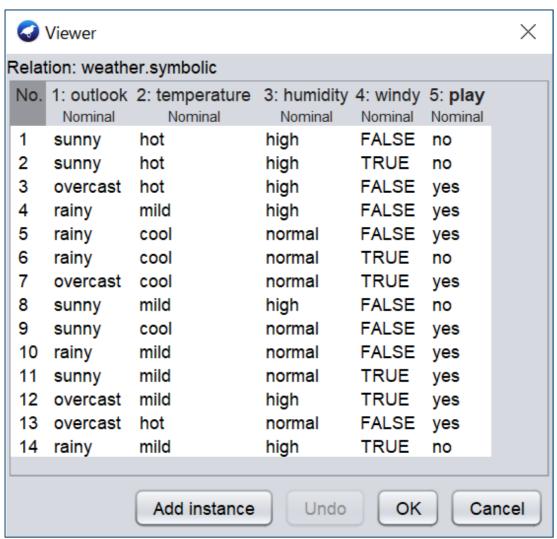
# Section 2

• 識別1 (3,4章)



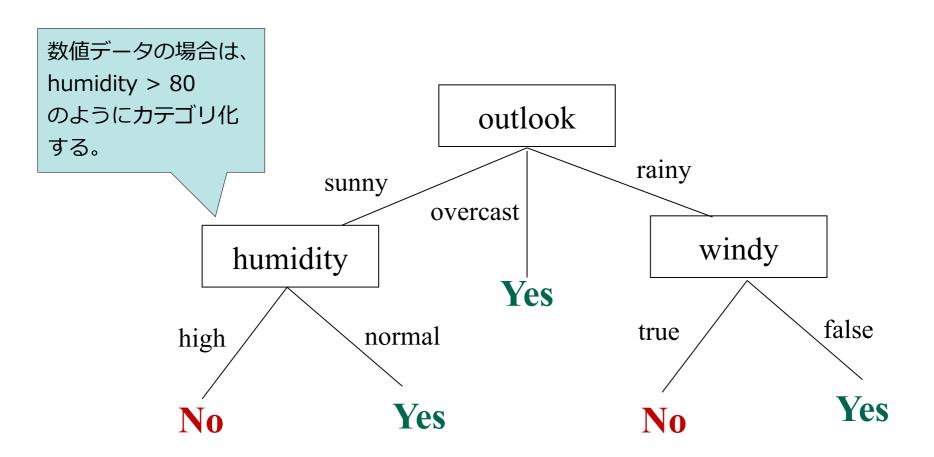
# 3. 識別 一概念学習一

学習データ (テニスをする日; weather.nominal.arff)



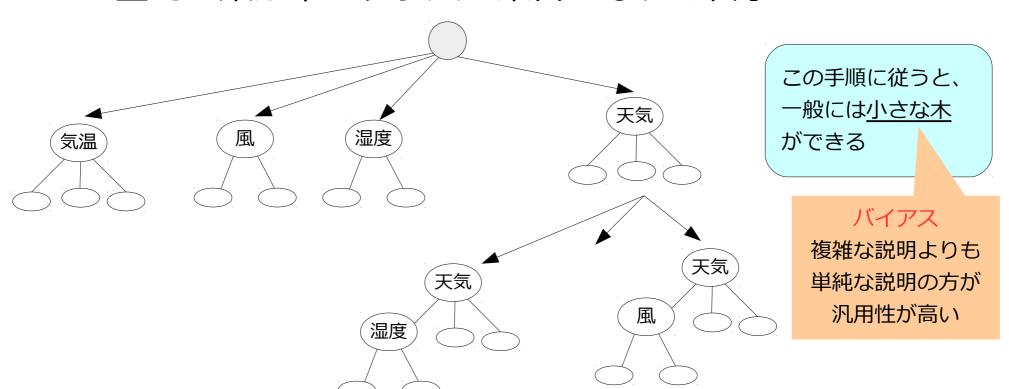
#### 3.4 決定木の学習

• 結果として得られる決定木



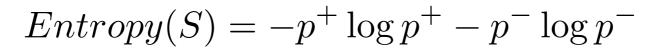
## 3.4 決定木の学習

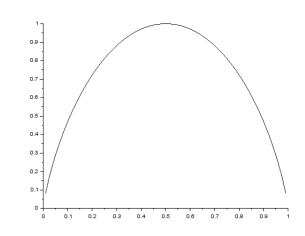
- 決定木学習の考え方
  - 節はデータを分割する条件を持つ
    - できるだけ同一クラスのデータが偏るように
  - 分割後のデータ集合に対して、同様の操作を行う
  - 全ての葉が単一クラスの集合になれば終了



# 属性の分類能力(1/2)

- 分類能力の高い属性を決定する方法
  - その属性を使った分類を行うことによって、なる べくきれいにクラスが分かれるように
  - ・エントロピー
    - データ集合 S の乱雑さを表現
    - 正例の割合: $p^+$  , 負例の割合: $p^-$
    - エントロピーの定義





# 属性の分類能力 (2/2)

- 情報獲得量
  - 属性 A を用いた分類後のエントロピーの減少量
  - 値 v を取る訓練例の集合:Sv
  - Sv の要素数: |Sv|
  - 情報獲得量の定義

$$Gain(S, A) = Entropy(S) - \sum_{v \in Values(A)} \frac{|Sv|}{|S|} Entropy(Sv)$$

#### 計算例

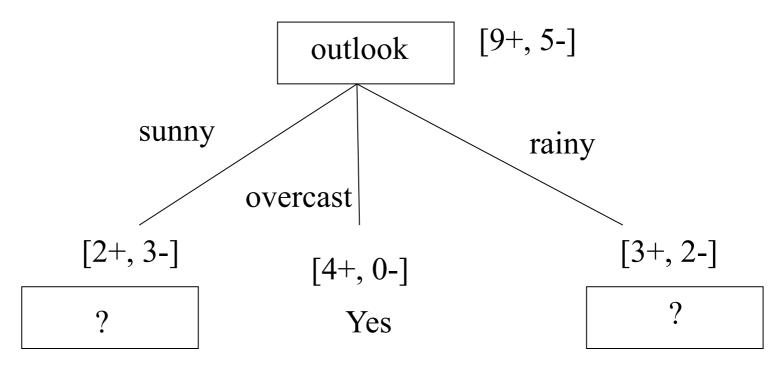
#### • 情報獲得量

Gain(S, outlook)=0.246

Gain(S, humidity)=0.151

Gain(S, windy)=0.048

Gain(S, temperature)=0.029



## バイアスの検討

#### なぜ単純な木の方がよいか

• オッカムの剃刀

「データに適合する最も単純な仮説を選べ」

- 複雑な仮説
  - → 表現能力が高い
  - → 偶然にデータを説明できるかもしれない
- 単純な仮説
  - → 表現能力が低い
  - → 偶然にデータを説明できる確率は低い
  - → でも説明できた!
  - $\rightarrow$  必然

## 連続値属性の扱い

連続値 A を持つ属性から真偽値 (A < c?) を値 とするノードを作成

→ c をどうやって決めるか

気温	40	48	60	72	80	90
playTennis	No	No	Yes	Yes	Yes	No

• 最大事後確率則による識別

$$C_{MAP} = \arg\max_{i} P(\omega_i | \boldsymbol{x})$$

max f(x): f(x) の最大値

 $\operatorname{argmax} f(x)$ : f(x) が最大となる x

 $oldsymbol{x}$ :特徴ベクトル

 $\omega_i$   $(1 \le i \le c)$ : クラス

• データから直接的にこの確率を求めるのは難しい

• ベイズの定理 
$$P(A|B) = \frac{P(B|A)P(A)}{P(B)}$$

$$C_{MAP} = \arg \max_{i} P(\omega_{i}|\mathbf{x})$$

$$= \arg \max_{i} \frac{P(\mathbf{x}|\omega_{i})P(\omega_{i})}{P(\mathbf{x})}$$

$$= \arg \max_{i} P(\mathbf{x}|\omega_{i})P(\omega_{i})$$

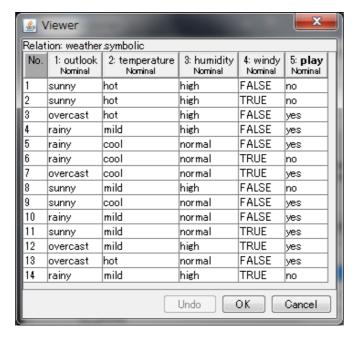
- ベイズ統計とは
  - 結果から原因を求める
  - ベイズ識別
    - 観測結果 x から、それが生じた原因  $\omega_i$  を求める
    - 通常、確率が与えられるのは原因→結果(尤度)
    - ベイズ識別では、事前分布  $P(\omega_i)$  が、観測によって事後分布  $P(\omega_i | \mathbf{x})$  に変化したと考えることができる

- 事前確率  $P(\omega_i)$ 
  - 特徴ベクトルを観測する前の、各クラスの起こりや すさ
- 事前確率の最尤推定

$$P(\omega_i) = \frac{n_i}{N}$$

N: 全データ数、 $n_i$ : クラス  $\omega_i$  のデータ数

- 尤度  $P(x|\omega_i)$ 
  - 特定のクラスから、ある特徴ベクトルが出現する尤もらしさ
- d 次元ベクトルの場合の最尤推定
  - 値の組合せが データ中に出 現しないもの 多数



Weka の weather.nominal データ 3×3×2×2=36 種類の組合せ

#### 4.2.2 ナイーブベイス識別

- ナイーブベイズの近似
  - 全ての特徴が独立であると仮定

$$P(\boldsymbol{x}|\omega_i) = P(x_1, \dots, x_d | \omega_i)$$

$$\approx \prod_{j=1}^d P(x_j | \omega_i)$$

$$C_{NB} = \arg \max_i P(\omega_i) \prod_{j=1}^d P(x_j | \omega_i)$$

#### 4.2.2 ナイーブベイス識別

#### • 尤度の最尤推定

$$P(x_j|\omega_i) = \frac{n_{ij}}{n_i}$$

 $n_{ij}$ : クラス  $\omega_i$  のデータのうち、j 次元目の値が  $x_j$  の個数

#### ゼロ頻度問題

#### 確率の m 推定

$$P(x_j|\omega_i) = \frac{n_{ij} + mp}{n_i + m}$$

p: 事前に見積もった各特徴値の割合

m: 事前に用意する標本数

- ラプラス推定
  - m: 特徴値の種類数、 p: 等確率 とすると、 mp=1

#### Section2 のまとめ

- 決定木
  - カテゴリデータの学習に適する
  - 学習結果の解釈が可能
- 統計的識別
  - 識別結果を確率付きで出力することができる